

Organization and Progressing of Media During
Wartime in Japan : Total Contents of "GENTI
HOKOKU" Published by
BUNGEISHUNJYUSHA(1)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-07-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 掛野, 剛史 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/624

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



戦時期メディアの編成と展開

— 文藝春秋社発行『現地報告』総目次（上） —

掛野剛史

『現地報告』は一九三七年八月から一九四三年四月まで、文藝春秋社より発行された全六七冊の雑誌である。ただ、創刊およびその後の展開については複雑な経緯を辿った雑誌であり、若干の説明を要する。そもそも「創刊」というが、この雑誌に一卷一号は存在しない。当初は『文藝春秋』の臨時増刊号として発行され、本誌と共通した巻号を持っていたからである。その後、定期増刊号として毎月発行となったが、その際、表紙に記されていた数字が通号のような形となり、それが廃刊まで通された。本誌と共通巻号は三一冊目

＝三一号まで続いたが、四〇年五月、『話』（一九三三年創刊）に統合された際、その巻号を継承し、三二号が八巻六号となった。この時『話』を改題する形で誌名が正式に『現地報告』となる。これは用紙統制へ対応するための統合だったが、その甲斐もなく四三年四月号をもって最終的に廃刊となった。

したがって正確に言えば『現地報告』という雑誌名は、「臨時増刊」が月刊化した三八年五月以降か、『現地報告』が正式誌名となった四〇年五月以降に発行されたものを指すのが適切かもしれない。巻号も『文藝春秋』本誌に属するものと、『話』を継承したものの二種

類ある。だが通号は一貫しており、内容面からみても『現地報告』として一括して扱う方が意味がある。本稿では前後二種類の雑誌をまとめて『現地報告』と呼び、その総目次を掲載する。ただ紙幅の関係上、『話』に統合される前の三一号までとし、それ以降については（下）として別稿を用意し、詳細な考察を行いたい。

以上のような不規則な形で発行された『現地報告』だが、当初増刊号として「創刊」されたものが、時局の展開に即して定期刊行になり、最終的には戦時期の用紙統制のため統合、廃刊となるなど、戦時期のメディアがどのように時局に対応した、または翻弄されたかという問題の一端を明らかにする重要な雑誌であり、稿者の関心もそこにこそある。紙幅の都合で目次の掲載にとどめざるを得ないのが残念だが、『文藝春秋七十年史』にこの雑誌の細目が掲載されていないためか、著名な雑誌でありながら、これまであまり検討がなされてこなかった雑誌であることは確かであり、今後の多方面からの研究のための基礎的資料として、本稿の意義は少なくないと信じ

〔現地報告〕一九三七年八月、一九四三年四月、全67冊。
編輯人 菊池武憲（三八年九月まで）↓花房滿三郎（三九年三月まで）↓永井龍男（四〇年四月まで）↓花房滿三郎（四〇年一月まで）↓池島信平（四二年六月まで）↓柳澤彦三郎（四三年二月まで）↓江原謙三（四三年四月まで）

発行人 菊池武憲（三八年九月まで）↓花房滿三郎（三九年三月まで）↓永井龍男（四〇年四月まで）↓花房滿三郎（四〇年一月まで）↓池島信平（四二年六月まで）↓齋藤龍太郎（四三年四月まで）

【発行日巻号（一覽）】

【文藝春秋】臨時増刊 15巻9号 37年8月15日
【文藝春秋】第二臨時増刊 15巻11号 37年9月10日
【文藝春秋】第三臨時増刊 15巻13号 37年9月15日
【文藝春秋】事変・第四増刊 15巻15号 37年11月15日（注）
【文藝春秋】事変・第五増刊 15巻17号 37年12月15日
【文藝春秋】事変・第六増刊 16巻3号 38年2月18日
【文藝春秋】事変・第七増刊 16巻5号 38年3月18日
【文藝春秋】時局月報8 16巻8号 38年5月10日
【文藝春秋】時局月報9 16巻10号 38年6月10日
以下31まで『文藝春秋』時局増刊

Table listing volume and issue numbers for 'Art and Literature' (文藝春秋) and 'Local Reports' (現地報告).

Table listing volume and issue numbers for 'Local Reports' (現地報告).

67 11巻4号43年4月6日
〔注〕 確認した三冊ともに奥付には11月15日発行と記載されてあったが、発売広告からみて、10月15日発行の誤植かと思われる。
〔凡例〕 本目録は、文藝春秋社から発行された雑誌『現地報告』の総目次である。本稿ではそのうち、『文藝春秋』本誌の増刊として発行されていた時期（一九三七年八月〜一九四〇年四月）の総目次を掲載した。

・総目次の作成にあたっては当該号の目次を参照した上で、すべて本文から採った。
・総題 タイトル、副題、肩書、著者名、開始頁、終了頁の順に並べて示した。
・複数の文章にまたがる総題とみなせるものは最初に掲げた個別のタイトルは行替えた上で一字下げて示した。ただし一頁のみなど短い文章はその限りではない。
・総題は本文に拠ったが、目次の分類も参照した。
・副題については、本文表記にこだわらず、すべてタイトルの後に「-」を付けてつけて示した。
・著者の所属や肩書を示すものは、本文の著者名に記されているもの限り、文末などの記載は採らなかつた。
・小説、詩などについては、題名から判別しづらい場合は題名の下に〔*小説〕〔*詩〕と記した。
・表記は原本通りとしたが、旧字体については一部現行通用の字体に改め、明らかかな誤植は正した。
・本文に個別タイトルのないものは、目次等を参照して付け（―）で記した。

『文藝春秋』臨時増刊

一五巻九号 一九三七年八月一日発行

Table of contents for 'Art and Literature' (文藝春秋) temporary supplement, Issue 15 Volume 9, August 1, 1937.

抗日運動の現段階
世界は事変をどう見たか
忽ち成る国家総動員の体制
支那共産党最近の動向
蔣介石の機密室
国民政府の資金網
怖るべき「抗日教科書」の内容
北支事変と九国條約
支那を喰ふ欧米諸国の利権
日本の対支権益
支那に踊る列強のスパイ
北支事変と日支條約
支那は事変を如何に宣伝したか―東戦は弱いが宣伝戦には強い

波多野乾一
山崎進之助
伊達圭介
田中正義
山上正義
山上正義
梶原勝三郎
御手洗辰雄
古城風秀
大平進一
山内保
工藤貞雄
S・V・C
平野孝児
佐山英太郎
村松梢風

『文藝春秋』第二臨時増刊

一五巻二二号 一九三七年九月一日発行

Table of contents for 'Art and Literature' (文藝春秋) Second Temporary Supplement, Issue 15 Volume 22, September 1, 1937.

戦時期メディアの編成と展開

戦争と財産 経済も武装する―戦時経済立法の必要	島田晋作	221	214	208	202																																				
支那事変と株式界	野崎龍七	225	220	213	207																																				
蘇支密約の決定的意義	勝田貞次																																								
支那空軍の飛行機と其性能	藤枝丈夫																																								
敵前上陸	依田昌二																																								
空爆日誌	平野零児	263	250	242	233																																				
上海戦の後援―道は如何に放進されるか	灘尾弘吉	267	262	249	239																																				
上海戦の概況 八月十四日より九月五日までの概況	灘尾弘吉	267	262	249	239																																				
編輯後記	文藝春秋編輯部編	288	268																																						
支那事変要図(未見)		288	288	287																																					
『文藝春秋』第三臨時増刊 一五卷一三三 一九三七年一月一日発行	扉絵 民族的使命の達成 第三艦隊論―意味を離棄から断乎る離棄へ 東亜政治の悲劇 支那事変の史的意義と北支の建設 「戦争はこれからだ」座談会 安達久 岡田芳政 菊地勇三 古古に意義あらしめよ 鈴木光何 田代軍徳 中谷武世 肥田孫一 鷲沢号四 現地通信 戦ひの上海から 文藝春秋 上海戦記者 これが最前線だ 蘇満国境を監視せよ 平竹信一 現地通信 冬迫る緩速を行く―重慶軍に接する緩速を 柳澤彦三郎 事変と物価と生活 文藝春秋特派員 服部文四郎 現地通信 我が海上遮断線を行く―遮断艦〇艦上にて 海軍記者 猪伏清 九二八記念日の夜 松本辰雄 事変費廿五億は何を齎すか 美濃部亮吉 英国の支那侵略史 丸山幹治 また恥をかかぬ国際連盟 阿部真之助 戦死軍人に捧ぐる歌(*詩) 佐藤春夫 時洋爆撃隊を讃ふる歌(*詩) 佐藤春夫 時事偶感(*短歌) 与野木信綱 いくさの秋(*短歌) 齋藤茂吉 時事歌抄(*短歌) 岡本かの子 千人針(*俳句) 水原秋桜子 事変に関する句(*俳句) 矢田挿雲 空中戦史より見た南京空爆 大場秋平 北支経営の基調 関山茂太郎 支那共産運動の二十年 トハチエフスキイ事件後の蘇連―ソ連は危険を乗り切るか 茂森唯士 東輝彦	182	174	171	160	159	149	148	147	146	145	144	143	141	139	133	127	119	112	97	88	81	74	64	60	34	25	14	7	4	3	25	14	7	4	3	33	24	13	6	3

焦慮の英国と退盟の米国	土屋計左右	216	207	199	188																																	
支那経済の行衛	田中香苗																																					
獄中記 支那事変に寄す 小宮朋務所にて	佐野学	235	213	206	198																																	
日本進軍の一里標	梅木典男																																					
政府の対ソ方針を聴く	藤崎敏雄																																					
西にスペイン・東に支那	小川泉																																					
東亜プロットの結成	松原弘雄																																					
親日転向への道	水島文雄																																					
寺内・松井最高指揮官	大平進一																																					
戦時体制と財界陣営	角田藤三郎	256	250	244	242																																	
世界に於ける南京空爆の反響	島田晋作	261	255	249	243																																	
支那を害ふ三人女―宋麗齡・宋美齡・宋美齡	長谷川了	288	278	270	262																																	
桃李の花―支那の女名貴	竹内夏積	288	286	277	267																																	
編輯後記	竹内逸	288	286	277	267																																	
『文藝春秋』事変・第四増刊 一五卷一五号 一九三七年一月一日発行	扉絵 支那事変と列国 世界史の転換 上海戦線の進展に就て 戦時財政の新段階 上海戦線に日支問題の将来を訊く 宇都宮直賢 藤田正一 九国條約効力の限界 法律家の立場より 清水三三 曾根裕一 寺岡謙平 立川光雄 馬淵進雄 小坂美一 支那はスペイン化されるか 清瀬一郎 遮断海域三千哩 浅川謙次 現地通信 満蘇国境を行く 遮断兵器の性能 南市危険線突破 スタリリン派とトロツキー派の相剋 在上海海軍記者 猪伏清 吾が戦費支出能力の限度 野田豊 事変後ソ連の対日動向 直井武夫 新赤軍を背負ふ人々 茂森唯士 南京政府の二大煩悶 大森与一 ソ連邦の社会 大平進一 極東赤軍の検討 東輝彦 赤色空軍の戦闘実力 須久香光 極東海軍の現勢と戦術 茂森唯士 極東赤軍の戦略展開を衝く ラス・ビハリ・マローリー	90	83	78	72	90	89	82	77	63	44	32	22	18	9	4	3	22	18	9	4	3	288	278	270	262	288	286	277	267	261	255	249	243	242	240	239	237

何も出来ない九国会議	丸山幹治	178																												
現地通信	柳澤彦三郎	182																												
通州・張家口	坂本徳松																													
支那文化人の動向―国立北京書籍館員訪ねて	丸山賢太郎	220	212	204	196																									
長期戦と公債消化の前途	村田政郎																													
支那はまだどれだけ戦ひ得るか	片山哲																													
銃後保護の社会立法	平竹信三																													
十路路に立つ中国	宋美齡																													
近衛秀磨久米正雄両氏に「日本の評判」を訊く	久米正雄																													
宣伝の上手下手	星島二郎																													
岐路に立つ外蒙古	古藤雷男																													
支那事変と其の後の九ヶ国條約	後藤龍男																													
九国会議と対日イコット	長谷川了																													
白人の植民地侵略史	今村信吉																													
童眼に映つた日清戦争	今村信吉																													
その火絶やすな―戦後の国歌として(*詩)	堀内敬三																													
挿話の軍歌	北原白秋	273	269	259	253																									
世界情報	堀内敬三	288	287	282	275																									
編輯後記		288	287	282	275																									
『文藝春秋』事変・第五増刊 一五卷一七号 一九三七年二月一日発行	扉絵 防共協定成立と日本青年 日独伊協定の世界的意義 ドクトル・フロンソー ドクトル・ハビール ムソッリーニとヒットラーの出現 ワルサー・ドーナー 香港から見た戦争 支那から見た戦争 焦土抗戦あるのみ 経済策戦 日本軍備するに足らず 抗敵戦略論 米國への感謝 米國に警告す 陳独秀会見記 長期戦と民衆武装 下層民衆の現状 白人のアジア侵略路線 白人は果して東亜から手を引くか 事変の推移に焦躁するソ連 九国会議以後 支那をどうする―座談会 伊藤好道 木村増太郎 杉森孝次郎 高橋龍吉 中谷武世 西岡晋次郎 応召者遺家族救済策―兼書同答 諸家(20名) 夜戰場を憶ふ 長江	2	1	2	1	6	1	288	283	276	274	288	287	282	275	270	260	254	245	240	236	224	220	212	204	196	188	183	182	177

瀕泣して太原を離る	大谷龍記者	陸詒	116
重慶還都の意義	上海を繞る國際取極の解決	中保与作	122
松井声明と租界問題	上海の海関と関稅問題	関島泰雄	130
支那のタクホリス白崇禧物語	支那風土記・四川省	仙波泰雄	138
支那風土記・四川省	極東における独伊の經濟發展史	吉岡文六	144
支那のタクホリス白崇禧物語	慘憺たるソ連民衆の生活	梶原勝三郎	151
支那のタクホリス白崇禧物語	支那農民の生活	座間美郎	158
支那のタクホリス白崇禧物語	南京政府の要人は何処へ行く	長野野	164
支那のタクホリス白崇禧物語	日ソ相対の將來	山上正義	174
支那のタクホリス白崇禧物語	シベリヤ鐵道沿線スケッチ	竹尾式	182
支那のタクホリス白崇禧物語	上海のグリムプス	除村吉太郎	191
支那のタクホリス白崇禧物語	北支工作の將來	三浦逸雄	198
支那のタクホリス白崇禧物語	政治工作	河野密	204
支那のタクホリス白崇禧物語	文化工作	太田宇之助	209
支那のタクホリス白崇禧物語	經濟工作	勝田貞次	214
支那のタクホリス白崇禧物語	大本營を繞る問題	野村重太郎	220
支那のタクホリス白崇禧物語	支那に於ける猶太財閥	丸川賢太郎	225
支那のタクホリス白崇禧物語	天佑の生還	日貝整一	237
支那のタクホリス白崇禧物語	世界情報	長谷川了	244
支那のタクホリス白崇禧物語	長期戦と株式投資	其角亭主人	251
支那のタクホリス白崇禧物語	応召者の債務と現行法	神道寛次	259
支那のタクホリス白崇禧物語	事變単語帖		277
支那のタクホリス白崇禧物語	編輯後記		283

『文藝春秋』事變・第六増刊

表紙	一六卷三号	一九三八年二月一八日発行	
須く堅忍持久せよ	小坂特派員撮影	中川紀元	3
不安なる世界の政局と英米の軍備拡張	松岡洋石	渡辺鏡藏	4
支那知識階級論	木下平治	三島章道	14
戦争に於ける教育と宣伝	上海戰線視察の感想	中保与作	18
支那新政府の相貌と將來性	大陸政策の二つの方向としての命題	原勝	27
日米支東半球経営論	一九四二・三年度の危機	水野広徳	33
植民地再分割論	國家総動員法案	小室誠	42
駐兵費現地支弁論	支那を掠める猶太勢力	野村重太郎	56
抗日ゲリラ部隊	日本と共に潰滅せん	三宅晴輝	62
「長期戦の準備は出来てゐる」座談会	喜日ケリラ部隊	三好武二	85
事變と織維工業	「長期戦の準備は出来てゐる」座談会	喜日ケリラ部隊	88
対立する歐洲国家群	英帝國主義の亜細亞貪喰史	梶原勝三郎	101

『文藝春秋』事變・第七増刊

表紙	一六卷五号	一九三八年三月一八日発行	
支那の戰略批判	新嘉坡の弱点を衝く	大場弥平	148
抗日の中樞を扶へる	支那世界の何故動いたか	齋藤忠	156
「國民政府を相手にせず」我が重大声明と世界の反響	長谷川了	189	
歐洲大戰の鍵はヒットラーに	チヤンドラ・ボース	196	
世界を動かす人々	現代世界人物素描	諸家(18名)	203
註文をつける(葉書回答)	愛國の志士呉佩孚將軍	竹内夏積	206
北支風土記(山東省)	北支那新商売案内	小口五郎	212
新政權下の北支經濟の全貌	淮南とところどころ	徳川義親	217
青島占領直後一週間	山東戦上陸から治安維持成立まで	小田操	221
八達嶺驢馬行	上海のGメンS.M.P(工部局警員)物語	森三千代	228
揚子江戦時ユウモア風景	北支事情誌	米村耿二	232
編輯後記		岸田国土	237

『文藝春秋』時局月報8

表紙	一六卷八号	一九三八年五月一〇日発行	
短期戦勝への途	長期抗日家語の支那に対する指導	成田健吉撮影	284
時局漫画	中支振興一路	坂西利八郎	288
時局漫画	國民貯蓄奨励局	穴戸左行	294
時局漫画	この意気で行け!!日本資本家	高木陸郎	304
時局漫画	断末魔の支那苦肉の虚勢	石川進介	308
時局漫画	ニユースのポイント	中国維新政府の實力	黒田礼二
時局漫画	防共協定より軍事同盟へ	防共陣營強化論	小島成彦
時局漫画	新交際問題	日支經濟提携の発足点	石川進介
時局漫画	ニユースのポイント	五馬連盟とは何か	王子恵
時局漫画	五馬連盟とは何か	市河晴子	314

戦時期メディアの編成と展開

時局漫画 平和の女神曰く	近藤日出造	49 47
時局漫画 道行き	下川四天	
「見て来た北支を語る」大学生座談会	細川清次	
尾崎正三／金子重弘／春日良嗣／高木正光／工藤白／三浦田勝太郎		
近藤武／北村秀三／大村俊		
六全大会後の蔣政権 香港に響く抗日の声	吉岡文六	73 68 50
時局漫画 政局明朗なり	近藤日出造	
支那の抗日インテリ論	原勝	74 73 68 50
黄土文明	石川三四郎	
時局漫画 物価統制	小野佐世男	89 82 81 73 73 67
アジアを拓く少年義勇軍	林房雄	
時局漫画 文藝春秋特撰	草城鉄人	
時局短言 エラ・メイヤー	下川四天	
天山南路	丸山幹治	123 114 108 90 89 82 74
時局漫画 建艦競争に躍るアメリカ	飯田蛇笏	126 123 125 113 107 89 89 81
職場から見た事変の波紋	木原通雄	134 130 133
新聞記者のデスクから	島田晋作	
銃後の山村	豊島信一郎	
首相官邸さのふけふ	川崎正雄	152 152
工場街と商店街	海野稔	157 152
ニユースのポイント	長井真琴	156 156
対日悪宣伝に狂奔するソ連新聞の論説	依田昌二	
敗戦支那新聞の社説から	五萬噸戦艦は可能か	188 183 170 162 157 152
ブレネル峠	巴里報告「世界動乱の前夜」座談会	190
印度見たまま	渡邊一郎／井上勇／町田梓雄 松尾那之助／小松清 城戸又／今日出海	
瀕死の支那空軍	義勇軍撤収後のフランコ政権	204 202
ニユースのポイント	足で描く北支経済	209 203
現地随筆	カイロで「君ケ代」を探す	210
北支那味覚放談	柳澤健	
ニユースのポイント	何が郷男を出馬させたか	212 210
新戦場の日本刀	小早川秋声	
杭州より南京	蒔田宗次	215 212
中支寸感 上海より	小林秀雄	218 216 212 210
シンガポールの裏街から 一東港街に集ふ華人精英	麻生豊	222 217 215 212
満蒙軍従軍記	成田健吉	232 230 227 229 261 259
ニユースのポイント	仏蘭西の内閣は何故短命か	249 247 243
極東従軍記	白耳軍軍事情報	
ロペールのポイント	メキシコ石油騒動の真因	248 244 239
ニユースのポイント	小野佐世男	250 250
殲滅戦法	大場弥平	
時局漫画	裸になつても力強く	262 260 250
近衛篤磨公大陸経営の先覚者 その一	渡邊幾治郎	277 279 261 259
編輯後記		

表紙(前線に活躍する我が観測気球)	堤泰三	4 3
原稿	宮本武之輔	13 3
時局漫画	堤泰三	13 11
これからの運用	堤泰三	
ちよいと脈打診	堤泰三	
戦線視察より帰って	野田清	14 19
海軍軍事情報及調査部長海軍少将 小農持政策の検討		
時事を境とした農村のプログラム	東畑精一	20
時局漫画	横山隆一	28 27 23
ヨロツパの新舞台	穴戸左行	
野審報国	那須皓	23 23
北支より帰って 一北支農村を如何に再建すべきか		
時局漫画	下川四天	33 33
坊つちやんは世界がお好き	黒田礼二	
独伊枢軸がものをいふ 一歐洲諸國の将来	武藤貞一	57 48 34 33
ソ連に對日戦意ありや	穴戸左行	
時局漫画 第二の最後の関頭潰滅		
国内改革は何から手をつけるべきか	松永安左衛門／清瀬一郎 藤本貞五郎	
杉山平助／赤松清 前田多門		
奥村和男／河野密 猪谷善一		
大藏公卿／宮本武之輔 津田清三		
服部守吉／二荒芳雄 浅野真一		
牧野三／馬場恒吉		
敗将李宗仁	玄永燮	66 58
朝鮮 台湾 満洲 事変下民族の記録	吉岡文六	71 65
半島インテリの動き	尤宗翰	
満洲国の新動向	李清桂	
戦時下の台湾点描	佐藤春夫	80 77 72
北京雑報	下川四天	93 84 80 77
時局漫画 防共マチの人氣		
文藝春秋特派員		
現地隨筆	劉氏嘉業堂の書物	94
戦線露影	小早川秋声	124 120 118
北京人氣質 事変下の北京生活	西村裕也	
徐州陥落その後に来るもの	奥野信太郎	133 123 119
徐州陥落と英蘇の動き	小室誠	
徐州会戦と国共分裂の時機	井上謙吉	146 142 134
支那側の徐州前哨戦記		
浴血 一台北莊闘戦記	陳湘	147 145 141
蚌埠潰走記	劉芳全	154 148
西部離海戦を死守す	長江	
ニユースのポイント	株相相場から見た徐州陥落	165 161 154 148
テエゴは独逸のものだ!!	齋藤忠	
回教礼拝堂の落慶式 一お伽の国の王子素朝	笠岡康忠	182 172 166 165 164 160 153
時局短言	笠岡康忠	
戦時資源愛ふ勿れ	巨巖生	187 181 170 165 164 160 153
事変下の綿業	中原虎男	188

鉄鉦資源は大衆観	竹内謙二	207 201 196 193
石油問題憂ふるに足らず	大村一蔵	
産金戦線異状なし	小山一郎	207 206 201 195
ニユースのポイント	文官制度改革案の眼目	
徐州陥落その後に来るもの	後藤和夫	219 214 213 208
徐州陥落後の蔣政権打診	波多博	
ニユースのポイント	佐伊会談を促進するもの	
徐州 淮水・揚州	岸丈夫	219 219 213 212
時局漫画	私の帰朝報告	
巴里はストライキ流行り 一近頃のフランスの世相		
現代英吉利人氣質	友田宜孝	238 232 226 220
めりけん小断	松浦嘉一	
昆明 一素稿	平井泰太郎	244 237 232 226
ニユースのポイント	英国在支勢力の尖兵・香上銀行	
満蒙東部国境線を往く	中村敏	252 246 245
国境の町ハルビン便り	阿部智義	
厦門島	永由君人	268 260 256 252 246 245
航研機・離陸から着陸まで 一木更津現地報告	大場弥平	
鴻門の会 一上野宮蔵		
時局漫画	下へもライトをあてることになつた	
いつまで続くデマ放送	近藤日出造	292 282 279 275
宮崎滔天 大陸経営の先覚者 その二	宮崎龍介	
編集後記		
「文藝春秋」時局増刊 一〇		
表紙 一六巻一〇号 一九三八年七月一〇日発行		
原稿 一夕間迫る「〇戦闘司令所」		
北鮮満洲旅行所感	高橋三吉	14 11 4 3
時局漫画 超弩級の新五相会議	穴戸左行	
対支経済工作の進展	太田正孝	25 11 13 3
時局漫画	関々しいフランス	
黄河氾濫 怒涛氾濫	穴戸左行	23 19
時局漫画	独走万里の蔣政権	45 30 26 25 23 19
時局漫画	英の破廉恥	45 47 29 25 23 19
大陸経営と新政権 明日の東亞歴史と日支提携の指針として	秋定鶴造	
時局漫画	蘆溝橋事件より一周年	近藤日出造
時局漫画	英仏の空爆抗議	岸丈夫
政戦両略の一元化	齋藤直幹	72 62 61 55
時局短言	「漢口攻略と事変の見透し」座談会	77 71 61 55
井上謙吉／大西瀧 佐藤安之助／藤澤清四郎 松平忠久／橋田実		

戦時期メディアの編成と展開

張鼓峰より漢口へ―時務報告	巨成生	7065
邊疆支那の将領たち	井上謙吉	7369
戦時国内問題の徹底解決		
出直すべし・国民精神総動員	新明正道	
技術者徴用と新技術者精神	宮本武之輔	
事変と土地制度	大熊信行	
生活の単純化徹底	東浦庄治	
転業問題の解決へ	島田晋作	
かくあらねばならぬ戦時医療制度	浦本政三郎	
ニュースのポイント	チエコ問題と英国の魂胆	
支那国民性十六講	塩谷温	
時局漫画	林京太郎	
しくじった威力偵察		
ドイツの大演習英仏の神経を失らす	近藤日出造	
現地画信 北京四題	中澤弘光	
もり上つて来る革新日本外交座談会	亀井眞一郎	
銃眼	木村鏡市 / 三枝實智 / 杉山謙市 / 田村幸策 / 長本徳明 / 宮崎勝彦	
服装と民族性	栗田元次	
日本人異状なし?	藤田徳太郎	
文部省と大学	黒田亮	
月と政治	栗生武夫	
政治学論	川原次吉郎	
現地画信 田園	三井高陽	
前線報告 進撃 支那戦線より	向井潤吉	
前線夜話 一等兵戦死	正治清英	
現地画信 ちよいと覗いた北京	松村益二	
蒙疆地区	宮尾しげを	
漢口実見記	後藤富男	
ニュースのポイント	エリツエ・ズバルバロ	
軍楽従軍記	独匈接近の意味	
銃眼	大河内一男	
北京生活学校訪問記	朱泉	
ニュースのポイント	消え行く支那の在外正貨	
裁判に現れたロシア人氣質	菱沼舟一郎	
揚子江上、日艦を爆撃す	梁国瓊 / 朱民威	
遊撃隊員の日記より		
ニュースのポイント	大学改革問題の重点を衝く	
戦時地方色を探る		
東北六県の人と産業		
銃後の漫画報告(＊漫画)	本誌特派員	
シベリア出兵	岸丈夫 / 加藤悦郎	
時局漫画 ソ支密議	竹尾式	
支那合戦譚 赤壁の戦	大場弥平 / 鈴木朱雀画	
時局漫画 失業・転業対策へ	穴戸左行	
白石元二郎(露国軍探偵 第二回)	＊小説	
編輯後記	木村毅 / 弦牧男画	

表紙(突撃寸前)	足立源一郎	3
原絵	有馬頼豊	4
戦時下・新秋直言	秋定鶴造	7
一面建設・一面戦争―勝利を確実保障する為め	堤寒三	10
時局漫画 英首相飛躍	神田正雄	19
武漢陥落後の湖南と四川―蔣政権が最後の軍庫と頼む画省	小泉紫郎	22
時局漫画	穴戸左行	35
蔣政権の落ちゆく先	小泉紫郎	35
連盟に立ちつぐ		
断乎! 広東攻略すべし座談会		
大石巨蔵 / 大山卯次郎 / 神田正雄 / 竹内夏積 / 藤田家介 / 横田実		
銃眼	後藤木雄	36
「文教」の必要性	隅部一雄	41
日本精神より亜細亜精神へ	草野豹一郎	41
出征兵士の欲送		
香港通信 香港から見た蔣の勢力	横田高明	51
銃眼	木村鏡市	51
チエコ問題縦横		
時局漫画		
胚芽米騒動	石川進介	62
宇垣人事	岸丈夫	62
兵士の記録 兵燹消えぬと	川下米一	69
現地報告 徳安へ―江南の山嵐	九鬼豊二	77
銃眼 支那の武士道	有高敏	77
作戦的に見た漢口攻略戦		
井上謙吉氏に訊く		
お前の国のもの	青木保	102
民族と外交	河野密	107
海軍航空隊に就て―航空夕話	加藤尚雄	111
時局漫画		
転業対策	加藤悦郎	117
戦線浴湯記	小野佐世男	118
楊樹浦飛行場	日名子実三	121
ニエルンベルク	重村実	121
防共軍事同盟への動き		
時務報告	巨成生	128
ニュースのポイント	マキノ線とジークフリート線	136
佐藤安之助・高木陸郎両氏に漢口陥落後の支那問題を訊く	佐藤安之助・高木陸郎	136
銃眼		
永い眼で見る	田誠	142
宗教改革	魚井勝一郎	147
デモクラシーの清算	新見吉治	147
伝軍を描きつゝ	麻生豊	147
水の武漢三鎮	松島慶三	147
心持たれた新聞記事(葉書回答)	諸家(13名)	147
支那側従軍記		
新戦場・廬山を望む	長江	159
南潯線陣地帯を往く	陸語	159
作戦指揮部の一隅から	曾猶式	159
陣中に張鼓峰事件を語る		

廢墟・広済に行きみて	店村日報	186
ニュースのポイント	李白文	189
満独通商協定強化		
対支中央機関の設置問題		
モスコに任んできて	相馬正男	191
ニュースのポイント	宇垣人事第一弾の特性	191
北京通信	大平進一	191
ニュースのポイント		
中華民国政府連合委員会の成立		
崩れる武漢政府		
荒尾精―大敵の死を告げる(その五)		
時局漫画 学生就職問題	近藤栄蔵	207
三国武漢の争覇―那合戦譚	森上雅二	207
白石元二郎(軍事探偵大敵精 第二回)	＊小説	
編輯後記	大場弥平 / 鈴木朱雀画	
「文藝春秋」時局増刊 一四	木村毅 / 弦牧男画	
表紙(安慶)	北村小松研影	250
原絵	中村研一	250
東亜の文化提携につきて	鶴澤総明	250
時局漫画 宇垣退陣後の外務省	堤寒三	250
陥落した広東とその攻略の意義	神田正雄	250
時局漫画		
我等にも権利あり	麻生豊	250
漢口陥落す	小泉紫郎	250
広東・武漢陥落と狼狽する英国	横田実	250
時局漫画 大地耕作機の運転近く	下川四天	250
漢口陥落とその後の戦勢	大場弥平	250
我が南支作戦と蘇連邦	竹尾式	250
古荘幹郎論	濱田尚友	250
塩澤幸一論	梅田吾郎	250
日支融和策の大移民―時務報告	巨成生	250
戦況最高潮に達す!! 座談会		
福山寛形(細谷實賢 / 松島慶三 / 津久井龍雄 / 大石隆基 / 山縣初男)		
銃眼		
知識の力	三枝博音	250
ウイジョンとイリウイジョン	片山敏彦	250
娯楽統制の点睛	権田保之助	250
揚子江一瞥	菊池寛	250
九江にて	浅野郎	250
南支航行遮断線	横山一郎	250
南支地理学 海南島	橘善守	250
広東派将領の悲劇		
前線將士に銃後の秋を伝ふ	相馬御風	250
東園秋景	岡本かの子	250
独塊合併の日の印象	宮本東野	250
南支地理学 九龍と澳門		
香港から重慶まで―長途自動車旅記		
南支地理学 南支の新鉄道	毛仿梅	250

支那側軍記 金輪峯下の激戦 日軍陽新に迫る 南支地理学 珠江(北江)・東江・西江 蘇連脱走兵を囲む座談会...

ソ連の日本將校研究 前線十日記(敵土日記) 長期建設のために 占拠地区治安の問題...

『文藝春秋』時局増刊 一七巻二号 一九三九年一月一〇日発行 表紙 裏紙 支那外交への巨歩...

戦時期メディアの編成と展開

石達開將軍(大正天皇国兵告簡) 小田嶽夫
 投降(*小説) 張露薇
 編輯後記

『文藝春秋』時局増刊「一七 一九三九年二月一〇日発行」
 表紙 小坂英一
 原紙 林唯一
 事変処理の基本條件 近衛声明批判
 再建支那と日満の基本的関係
――平面的外交関係か東進進邦の編成か
 日本経済平等の原則 中谷武世
――東亜経済ブロックと日支平等の原則
 無賠償・領土無割譲・治外法権撤廃 高木寿一
 東亜建設事業の見通し(問題とは治安工作の崩壊) 杉森孝次郎
――上の歴史哲学的視点
 支那赤軍巨頭論 小室誠
 陸軍の興亜中堅男(興亜中堅百人男の内) 橘善雄
 汪兆銘脱出を私は斯う観る 菅原節雄
〔幸先きよき一石〕
 〔蒋介石と默契ありや〕 大蔵公望
 〔和平到来未し〕 阿部真之助
 〔汪兆銘の心境〕 太田宇之助
 巴里雜信(私の福朝報告) 城戸又一
 脱皮する広東 林炳耀
 興亜の先駆・日本工学を語る座談会(岡部栄) 58 52 50 49 48
報明(脚木雅次/平山俊二郎) 松前重義/宮本武之輔 山下興家
 銃眼 天は二物を与へぬ 津村秀松
 本と兵隊 吹田順助
 防共とユダヤ排撃 笠間果雄
 もつと情熱を 本多顕彰 79 77 71 69
 前略御免各人各界に呈上(*漫画) 岸丈夫/加藤悦郎 88
 平沼内閣を私は斯う見る
 〔何等期待せず〕 杉浦武雄
 〔事変收拾を期待す〕 馬場恒吉
 〔じつくりした心構へ〕 東浦庄治
 〔指導力は民衆の手に〕 木村毅
 支那語漫筆(江口時代に於ける語彙の流行) 竹田復
 花の広東(文藝春秋従軍記者) 小坂英一 106 96 94 93 92 92
 英米の対蒋借款を私は斯う観る
 〔予想の實現〕 田川大吉
 〔日本の難關〕 坂垣直吉
 慎重な対策 金原賢之助
 〔有償的贈物〕 小早川秋生
 寒天の大湖湖に悼して 古池生
 平沼内閣への眺望(時務報告) 白石潔
 従軍報告(十九人の少尉) 下川四天/石川進介
 世界ニュースを拾ふ(*漫画) 長澤豊
 前線療養班 144 140 128 124 122 120 119 118 116 105 94 94 93 92 88 79 77 71 69 64 58 52 50 49 48 47 39 32 22 17 13 10 4 3 3

日ソの危機を私は斯う見る(日本国力の打診) 杉山平助
 〔最も深刻なる対立〕 木村銳市
 〔全面的危機〕 喜多村一郎
 〔世界大戦の責任は誰?〕 丸山政男
 〔防共反共より一歩前進〕 藤澤親雄
 銃眼 実證的批評 今日出海
 日ソの危機を私は斯う見る(ソ連の大誤算) 角谷健次
 泥濘二百八十里 歩兵曹 前山賢次 167 166
 従軍 船内 生澤朗
 進発 伊原宇三郎
 大同西門 向井潤吉
 戦ひの後 伊原宇三郎
 孔祥熙邸にて 伊原宇三郎
 支那台戦譚 諸葛孔明 大場弥平/鈴木朱雀画
 編輯後記 256 242 200 196 178 174 171 256 255 201 197 179 175 171
 『文藝春秋』時局増刊「一八 一九三九年三月一〇日発行」
 表紙 林唯一
 第二次世界大戦への展望 中村研一
 新東亜建設基地としての北支 鹿島守之助
 現地報告 上坂西三
 対日感情をアンリール大使に訊く 菱刈四郎
 〔東亜協同体〕論争 28 22 20 13 4 3
 銃眼 感謝の表現 谷口吉彦
 感涙の真剣 小野武夫
 〔汪兆銘・真佩享 和平運動の展開を語る〕座談会(井上謙吉/太田宇之助) 33 33
 銃眼 支那は脱線の国 有高巖
 生那拡充と改革 杉山平助
 戦争意識の進化 津久井龍雄
 議会議論の貧困 尾山大作
 支那評論家群像(興亜中堅百人男の内) 大宅壮一 68 58 51 47 43
 世界危局に対処すべき日本の外交工作案をどう作るか
 法幣との関ひ(その宿命/将来の見通し)就て 田村幸策
 日鋼修理班(開封攻撃前中記) 松岡孝尼
 海南島占領の意義と列国の動向 成瀬潤次
 海南島奥地踏破記 レオナルド 大山明次郎
 燕京食譜 奥野信太郎
 〔断乎! 租界テロを根絶せよ〕座談会(大宅壮一/加田哲/田村幸策/中保作/村政部) 126 116 108 88 80 74 133 125 114 107 86 79
 銃眼 統制の余慶 伊原宇三郎
 従軍画 商学院 伊原宇三郎
 支那開の「長期建設」報告(大美晩報) 徳孩之 148 147 137 134 147 137 146
 中蘇公路の全貌 大美晩報 荻烈輝
 蒙古語漫筆 山本兼久
 空のトビック 小林元
 東回教團印象記 小田嶽夫
 郭沫若と郁達夫(創造社の詩人) 加藤悦郎/岸丈夫
 興亜の蟲(*漫画) 小田嶽夫
 ヒットラームツソリーニ外交戦術(歐洲時局談義) 坂東公望
 通電物語 小口五郎
 前線兵士の手記 川下米一
 徐州街道 210 204 196
 漢口にて 吉岡堅二
 九江にて 吉岡堅二
 擬装トーチカ 伊原宇三郎
 前線兵士の手記 伊原宇三郎
 廬山戦線百草枯れたり 宮崎元
 従軍画 小堂子の戦跡 伊原宇三郎
 孔明涙を揮つて馬護を斬る(支那台戦譚) 大場弥平/鈴木朱雀画 239 228
 編輯後記 256 240 239 238
 『文藝春秋』時局増刊「一九 一九三九年四月一〇日発行」
 原紙 中澤弘光
 功利的と浪漫的と(現場工作に於ける我等の態度) 杉村広蔵
 支那事変の解決について 坂西利八郎
 現地報告 女性宣撫班 川島理一郎
 防共枢軸を中心とする歐洲の外交戦(阿部謙馬/室川基彦/片山哲/東浦庄治) 荊田均
 〔統後労働力の革新〕座談会(吉岡金市/阿部謙馬/室川基彦/片山哲/東浦庄治) 36 26 24 23 12 4 3 35 25 23 22 10
 銃眼 医科大学の志望者 高野六郎
 辺疆に対する関心 大野章
 興亜会 尾佐竹彦
 国家以上のもの 大熊信行
 興亜経済中堅男(興亜中堅百人男の内) 北川一夫
 今議会の経済立法は何を語るか 岩井良太郎
 生支那強の現地視察 神田正雄
 建設戦と苦力の問題(興亜政策基本問題の二) 中保与作
 立ち上がる世界の回教徒 柴田隆夫
 クルツ工場とその思ひ出 三宅驥一
 〔法幣と如何に関ふべきか〕座談会(加田哲/金原賢之助/高木陸郎/山崎清純) 108 106 99 92 86 80 69 62 57 51 47 43 107 105 98 91 85 79 68 57 51 47 43
 銃眼 協力の必要 木原均
 世紀の武器 森岩雄
 赤露素描 赤松俊子
 医者之眼と大陸 石井信太郎 128 123 119 115 108 136 127 119 115

Table with 4 columns: Title, Author, Page, and Page. Includes entries like '従軍画 廃墟素描' by 川島理一郎, '支那の外交官たち' by 鶴岡栄雄, and '融雪期の東北農村' by 田中裕一.

Table with 4 columns: Title, Author, Page, and Page. Includes entries like '特輯・傷兵問題' by 本庄繁, '我が更生感想' by 永井亨, and '戦場の勇士' by 藤川忠治.

Table with 4 columns: Title, Author, Page, and Page. Includes entries like '支那の外交官たち' by 鶴岡栄雄, '戦時下の諸問題' by 池田千秋, and '支那に対する文化工作' by 加藤悦郎.

(10)

戦時期メディアの編成と展開

信陽にて 前線兵士の手記	大野隆徳	231
車輪部隊	今井松太郎	232
従軍画 山峡を征く	宮田重雄	237
衛生隊の活躍	伊原宇三郎	241
敵状監視	向井潤吉	243
支那の空中作戦	石井相亭	245
萬全県	北村小松	245
編輯後記		243
『文藝春秋』時局増刊 二二 一七巻 四号 一九三九年七月一〇日発行		
現地思想戦の展望	宮田重雄画	12
内鮮一体の強調	赤松克麿	4
現地報告	南次郎	11
租界と法幣への幻想	杉村広蔵	20
上海租界の運命	新明正道	22
対英海上封鎖の完成	齋藤忠	28
支那を喪ふ英国—天津租界陥落を繞つて	中保と作	35
「日独伊軍事同盟と支那事変取捨」座談会		27
兼貫一郎 五来敬造 / 清水盛明 / 中谷武世 / 福山善三 / 三島英夫		49
銃眼		76
戦慄すべき事態	大泉秀信	57
節約の問題	上原信行	61
日本文化と創造	古川晴男	63
なめられる外交	本多顕彰	65
衣食住と日本文化	三島一	67
経済封鎖恐るるに足らず	岩井良太郎	65
軍事同盟が出来たら	小池四郎	82
日英同盟の轍を履むな	丸山幹治	83
世界新秩序建設のために	小島精一	85
龍虎相搏つるとき	杉浦武雄	86
新東亜建設第一	清瀬一郎	87
人類発展への一里塚	杉森孝次郎	88
道理と実力	大山卯次郎	89
戦争防止の爲にも必要	山口次郎	90
対戦策決定と支那新聞の狼狽振り	小本実彦	92
支那中堅官僚の和平論 南京訪問記		95
軍事同盟が出来たら		99
英仏を情伏させた独空軍	マーク・エー・ローズ	103
ノモンハン血戦従軍記	坂下健一	108
油頭占領と事変の見透し	藤田栄介	119
支那人の性格	奥野信太郎	122
従軍画 揚子江上船中	福田豊四郎	129
胎動する満洲文化	村村勇造	130
江南砲艇隊誌	木村重	136
戦争と精神病	諏訪敬三郎	144
白人は支那で何をしたか	藤井啓之助	148
チエツコ抹殺の日	瀧川政次郎	157
宮官き、がき	永戸俊雄	164
興亜科学者群像		174

大陸通信 その三 山西交通列車—王太銀行客車から検次まで	池島信平	182
支那街頭風景 (*漫画)	宮尾しげを	190
南洋村報告書	岩崎榮	194
廬山その他 日支従軍記	恩地孝四郎	200
便乗世相抄	高田正治	202
前線兵士の手記	渡邊保治	207
従軍画		189
通州白塔	中澤弘光	218
取乱した敵の參謀長室	小早川秋声	219
天津市役所跡跡	吉田謙吉	221
海南海口角の一角	吉田謙吉	222
武昌より漢口を望む	福田豊四郎	223
前線兵士の手記 光州城まで—車両部隊—	今井松太郎	228
従軍画		236
戦塵を洗ふ	小早川秋声	231
廈門よりコロンス島を見る	吉田謙吉	237
「スパイの科学」物語	海野十三	237
後方戦記 従軍記者のメモから	白石潔	243
編輯後記		256
『文藝春秋』時局増刊 二二三 一七巻 一六号 一九三九年八月一〇日発行		
表紙 (北京萬寿山仏光閣)	立上秀二	3
犀紙	中澤弘光	3
日英相剋の推移	今井登志喜	4
移り行く英国の立場—歴史家の見た—持てる因 英国の正統	熊岡美彦	11
従軍画 厦門華僑の寺	金子鷹之助	12
日英相剋の推移	伊東敬	22
日英経済戦の将来	齊藤陽太郎	28
英国外交官氣質	朝井閑右衛門	34
日英会談と駐支領事	津久井龍雄	41
天津イギリス租界の隔絶		40
〇〇特務機関のA女史		37
従軍画		21
汪兆銘の前進と日本		48
現地報告	杉山平助	50
汪兆銘声明を批判し	横田高明	52
上海に於ける汪兆銘声明の反響		51
海の特ピック	古城江親	64
従軍画 海南島の蕃族	齋藤忠	65
日本戦争字—多田哲知氏の著書を紹介して	熊岡美彦	66
日英相剋の推移 三虎 東京会談を監視する座談会		71
銃眼		89
世界戦争とドイツ文学	舟木重信	79
因南鵬翼何時奮	青木好三	81
たノ頼む	中野好太郎	83
武力以前、武力以後	田中惣五郎	85
本質的生活合理化	藤森成吉	87
チエンパレン閣下 (*漫画)	岸丈夫	87

外蒙戦線現地報告	飛石賢一郎	94
メレゲネー高地総攻撃	坂本邦磨	102
火を吐くホロンバイル平原	〇基地にて	106
ポイル湖上空戦従軍記	橋善守	112
ノモンハン戦勝の諸発見	朝井閑右衛門	117
従軍画 上海で逢つた南郷少佐	逗子八郎	116
生きてゐる海南島		111
気魄と犠牲—上海軍長—佐藤隆氏と元杭州市長—何讓氏	伊藤武雄	128
新北京の支那人	小田嶽夫	134
支那の智識階級	奥野信太郎	142
断髪異変—世相抄	淡路門太郎	148
戦雲下の蒙古草原	大宅壮一	154
東辺道開発地帯	立上秀二	162
北京と北京人を語る座談会		171
石川期 / 石原謙 / 石橋正徳 / 牛島吉郎 / 城所英一 / 佐藤隆 / 佐藤重武 / 中村忠 / 水野真 / 村上知行 / 久米正雄 / 立上秀二		191
銃眼		172
国民の声、日本精神の発現	福井久蔵	183
日本人の死	石川三四郎	187
銃後だより	乾信一郎	192
お蠶様	山本正雄	193
夏六題 (*漫画)	加藤悦郎	195
兵隊志願 (*小説)	由水盈	197
戦争夜話—皇軍の略略力	池崎忠孝	203
前線兵士の手記	鷲尾洋三	207
戦線のある三日間—伍長の手記		219
従軍画		213
小休止	野間仁根	217
広東の昆虫	野間仁根	218
漢口英租界乗取り前後	太田宇之助	220
棉の花 (*小説)	鳥海青見画	221
従軍画 亜熱帯戦の労苦	古城江親	227
編輯後記		256
『文藝春秋』時局増刊 二二四 一七巻 一八号 一九三九年九月一〇日発行		
表紙	吉田潤泉影	3
犀紙	鳥海青見画	4
独ソ不可侵条約と日本	中野正剛	10
独ソの接近とタンチツト問題	小室誠	18
現地報告		17
新事態に備するの途		9
従軍画 開北		3
法幣下落と其の将来	柏原広太郎	25
大陸農村を巡りて	松岡孝児	26
大庭農村を巡りて	南薫造	33
米国の魂胆を語る—丸岡信と日米通商條約破裂との通商	吉植庄亮	32
空の特ピック	稲原勝治	42
特区法談の接収を急げ	横田高明	48
「東京会談決裂以後」座談会		54

銃眼	清瀬一朗 / 鈴木康三 / 中谷武徳 / 濱野太郎 / 福山喜郎 / 松岡春虎	118
大星の謎	萩原朔太郎	110
戦争と食糧	千石原太郎	103
人口研究所の機構	寺尾新	94
英貨不買	竹内時男	84
山の湯風景	富安風生	77
従軍画 杭州	柏原寛太郎	75
大國を治むるは小鱗を煮るが如し	小宮義孝	71
現地に見る日本の東亜新秩序	諸橋徹次	67
共産第八路軍の活躍	坪田譲治	63
満洲増産地帯を往く	阿部真之助	59
「東亜の進路を論ず」対談会	立上秀二	59
赤色特区を行く	エル・カルメン	56
燕京街巷声音記	奥野信太郎	56
有名支那通の横顔	加藤悦郎 / 村上知行	56
沃野と快速車	小田嶽夫	56
揚子江の青帮紅帮	中山善三郎	56
「東亜の進路を論ず」対談会	岸信介 / 亀井貴一郎	56
鼠を裏のる話	和久田幸助	56
屋根裏のアトリエ	小磯良平	56
銃後だより	丸川賢太郎	56
今年の稲作	上田長太郎	56
夏の夜の心斎橋筋	山内逸造	56
精動について	島崎曙海 / 野間仁根	56
宣撫班戦記	石島徳一 / 宮田重雄	56
特務兵と小孩(＊小説)	南薫造	56
従軍画 病院船にて	高田修	56
前線兵士の手記	橋本三郎	56
従軍画 トラック行軍	池崎忠孝	56
英国陸軍の真価	吉田謙吉	56
編輯後記	末次信正	56
『文藝春秋』時局増刊 二五	松村爾	56
一七卷二〇号 一九三九年一月一日発行	濱野末太郎	56
厚絵	小早川篤四郎	56
日本の国防的地位	馬場秀夫	56
対支文化工作の第一歩	御手洗辰雄	56
対米外交政策確立の秋	津久井龍雄	56
岐路に立つ伊太利	30	
従軍画 南方根拠地風景	28	
歐洲動乱に棹さすスターリン	24	
攘夷の歴史の必然	23	
	22	
	18	
	14	
	8	
	4	
	3	
	4	
	3	
	7	
	3	

従軍画 呉淞附近	長坂春雄	216
大いに語るオットー・独逸大使	本誌記者	217
現地報告	重徳泗水	216
巷の戦争談義 喧嘩両成敗	大平進一	216
徹底的排英に進む中国人	阿部真之助	216
巷の戦争談義 他力本願を警戒す	横田高明	216
大戦勃発と現地の感情	鶴田吾郎	216
上海に描く歐洲戦の波紋	上泉秀信	216
従軍画 野戦風呂	尾池義雄	216
巷の戦争談義 擬装平和主義の敗北	尾池義雄	216
大戦勃発と現地の感情	尾池義雄	216
凋落過程の白人勢力	尾池義雄	216
「歐洲大戦の軍事的考察」	尾池義雄	216
銃眼	久保恒三 / 桜井徳太郎 / 林桂 / 坂西良 / 福山喜郎	216
大戦の予言	新明正道	216
日英会談の教へたこと	高垣寅次郎	216
朝鮮の米	東浦庄治	216
砂糖・王子・牛乳	上野陽一	216
「金・不買同盟」	相場正佐	216
巷の戦争談義 世界の総決算まで	下中弥三郎	216
従軍画 封鎖任務	小早川篤四郎	216
巷の戦争談義 無血外交の失敗	津村秀松	216
「斯くあらねばならぬ新中央政権」対談会	長坂春雄	216
巷の戦争談義 ひとすらいに國を憂ふ	高木陸郎	216
興亜行進曲(＊詩)	坪田譲治	216
「物価とわれらの生活」対談会	佐藤春夫	216
従軍画 望遠の豚	栗本勇之助 / 竹内可吉	216
香港排日再開	鶴田吾郎	216
複雑怪奇、新聞論調を叩く	和久田幸助	216
大戦勃発と現地の感情	佐藤京之助	216
天津水害と支那人	大賀千歳	216
国民は此項何を話してゐるか	相模太郎	216
実業家の私的会談	奥村五十嵐	216
労働者と一膳飯屋風景	泉田律子	216
インテリ女性の時局認識	伊集院齊	216
支那の洪水	北村小松	216
支那学校見学記	伊集院齊	216
南洋大いに動かんとす	澤田謙	216
動亂歐洲の波紋を覗く	岸丈夫	216
陸驚、空中戦の実相を語る座談会	岸丈夫	216
銃眼	大村孝 / 高梨辰雄 / 西原勝 / 武蔵市市	216
優生政策	高野六郎	216
二十年後	本多顕彰	216
ジータクフロード線行記	エマニエル・タスチエ	216
北京雜記	奥野信太郎	216
銃後だより	奥野信太郎	216
出版界の動き	長野英一	216

神戶元町	上田長太郎	172
兜町	弓削白弘	172
想定される歐洲戦局(＊小説)	木村秋生	172
陣中守り唄 野島嘉寿の挿話	池崎忠孝	172
後送部隊(＊小説)	大江賢次 / 福田豊四郎	172
編輯後記	木村秋生	172
『文藝春秋』時局増刊 二六	福田豊四郎	172
一七卷二〇号 一九三九年一月一日発行	福田豊四郎	172
厚絵	南薫造	172
歐洲大戦の現地縦横談	船田文	172
ソ連の東方進出と日本	竹尾式	172
重慶政府内の和平論	中保与作	172
歐洲大戦の歴史の考へ方	今井登志喜	172
靖國九の齋す動亂歐洲第一報	矢木榮	172
動亂から過れ来て	平山徹	172
戦時下の独逸国民	平山徹	172
戦時下・米独の航空機工業	平山徹	172
従軍画 匪賊の襲撃	山本峰雄	172
宣戦後三週間のロンドン生活	福田眉仙	172
「近代戦と宣伝」座談会	鈴木良三	172
現地報告	鈴木良三	172
新政権運動胎動下の南京	富岡羊一	172
發展一路の済南	前田七郎	172
英國海軍の王座危し! 座談会	富岡羊一	172
銃眼	橋本隆雄 / 加治木智博 / 岡部平 / 原田龍次 / 広瀬孝太	172
何故あなたは笑ふのか?	吹田順助	172
百年の悔	石井信太郎	172
兵隊と寄生虫	郷晃太郎	172
ピンパー大尉の死 / モンハン事件話	郷晃太郎	172
仮称宣撫班	坂下健一	172
現下満洲国の諸問題	松永健哉	172
協和会全理事事に観る	松永健哉	172
歐洲小国群の運命を卜す	山田清二郎	172
嵐の中に立つフィンランド	山田清二郎	172
外交を随筆風に	山田清二郎	172
バルカン諸小国の運命	市河彦太郎	172
銃後のことども	田村幸策	172
従軍画 進上進上	齋藤瀧	172
戦線の読書	鈴木良三	172
北滿の読書	後藤泰夫	172
従軍画 絵日記を描く軍医	武藤泰夫	172
北境・樺太	清水登之	172
巷説探訪	清水登之	172
紫金城見物記	林房雄	172
日本の宣伝機関とその陣容	岸丈夫	172
従軍画 鯉職と御神燈	相良徳三	172
「近代戦と宣伝」座談会	清水登之	172
秋山邦雄 / 岩本清 / 藤波吉巳 / 林野亨 / 松永忠男 / 松岡重美 / 横澤光輝	清水登之	172

(一一)

戦時期メディアの編成と展開

「文藝春秋」時局増刊 二七 一九三九年二月一日発行

責任政治 藤田徳太郎 189

最近の政界 関口泰 183

輿論について 小田嶽夫 179

あの手の手 杉野忠夫 200

燕京品花録 奥野信太郎 189

忠霊顕彰と忠霊塔建設 桜井徳太郎 210

おげさ便り 岩崎榮 208

（物価は高いか） 安部玉雄 210

抗日支那人の対大戦心理 中島清光 212

これを死守せし時（*小説） 河合幹 214

血のスターリン謀略（血の羅生門で後等は何故自したか） 関整/鶴田五郎画 218

Q県龍城記（*小説） W・G・ムラーリン 213

編輯後記 関整/鶴田五郎画 212

「文藝春秋」時局増刊 二七 一九三九年二月一日発行

原絵 福田豊四郎 3

事変処理と現地感情 杉村広蔵 4

ローズヴェルト大統領への書簡 浅野良三 10

日本はこれでよいのか!! 津村秀松 14

日本政治の実体を求む!! 竹内謙二 22

統制経済への反省 久保田金徳 21

従軍画文 夜明の北京 加田哲二 37

日本はこれでよいのか!! 宮本武之輔 45

思想対策・これでよいか 有馬頼寧/東畑精一 46

高原千里（東部の旅を描く） 齋藤清衛 51

日本はこれでよいのか!! 横田高明 55

ひたすらに日本農村を愛ふ!! 東郷実 62

有馬頼寧/東畑精一 46

統眼 齋藤清衛 51

実践の活用と体験 東郷実 62

史道刷新と官吏制度 横田高明 55

新政権成立と重慶との関係 北詰吉 78

欧州に観る今次大戦の特徴 丸山政男 85

モロトフといふ男 榎倉省吾 84

従軍画文 苦力 齋藤忠 88

北海奇襲作戦（南支新作戦の意義） 山藤初男 90

雲南省長・龍雲のこと 山田清三郎 96

なつかしき満人たち 山田清三郎 90

満人作家随筆集 山田清三郎 96

一生の大事 辛嘉 105

冬夜剖記 古丁 107

満洲文学雑誌記 辛嘉 107

現地報告 古丁 109

「軍の機械化と日本の科学」座談会 加藤五郎/辻二郎/宮澤清/友田喜孝/松前重義/宮本武之輔

銃眼 本郷寿次 121

備極統制と生産の確保 本郷寿次 121

米の問題 結城哀草果 125

天津は水禍から全く復興した!! 在天津 東剛整一 133

「文藝春秋」時局増刊 二八 一九三九年二月一五日発行

首妹の話（*小説） 火野葦平 143

背囊（*小説） 上田広 138

想ひ出の加納部隊（*小説） 日比野士朗/島海青児画 150

従軍画文 鯉つり 榎倉省吾 161

低地・和蘭風物帖 箕輪三郎 160

英国艦隊根拠地スカパ・フロー―戦争夜話 その二 池崎忠孝 173

小村ア

歐洲大戦とアジア民族の動向座談会 澤田野/杉本孝次郎/中谷武世/矢田部保吉/ラス・ビリー/ボリス

銃眼 時局と商船 和辻春樹 174

従軍画文 雲崗の子供 瀨野寛蔵 191

風塵雜筆 青野季吉 192

支那重幼談 奥野信太郎 198

精那にブランを与へる 諸家（27名） 207

七八〇高地奪取記（*小説） 指方文夫 210

従軍画文 寺の老女 恩地孝四郎 218

山を征く飯塚部隊（*小説） 鷲尾洋三/大野隆徳画 219

田村怡与造將軍（參謀本部の柱石） 木村毅/松野一夫画 220

従軍画文 陣中訪友 瀨野寛蔵 235

編輯後記 瀨野寛蔵 254

「文藝春秋」時局増刊 二八 一九三九年二月一五日発行

原紙 立上秀二 4

表紙 大野隆徳 3

歐洲大戦と潜水艦戦術 高橋三吉 11

従軍画 黄坡にて 瀨野寛蔵 12

ソ連の民族政策 小林一三 11

私考へる事変処理 竹尾一 10

照国丸事件の教訓（新しい通敵破壊への展望） 加藤元一 26

芬蘭の憶ひ出 リレー評論・昭和十五年に望む!! 齋藤清衛 46

新聞人より政治家へ 丸山幹治 52

産業人より官僚へ 魚井貫一郎 55

現地報告 斯波孝四郎 52

「経済官僚と時局」座談会 三妻五美良長 55

榎島子彦/榎茂菊/迫水常三/五置敏三/水野俊雄/美濃部洋次 同松成太郎

銃眼 馬ツチ 62

マツチ 60

最新記事 西村明恒 67

新聞と議會 今村真次 69

ガス・マスク 坪田譲治 71

白根戦の実相 福原麟太郎 82

動乱歐洲戦日記 成瀬四太郎 77

警備地区の仲間たち 木村章平 79

平地泉・宣撫療養班 宮田重雄 90

従軍画 宿舎 榎倉省吾 94

チャ―チル海相の復活（戦時英国内の一縮図） 原至一郎 120

「文藝春秋」時局増刊 二九 一九四〇年二月一日発行

声なきに聴け!! 中野民治 130

牛乳配達日記 飯島福造 136

帰還兵の覚書 横田伍郎 132

月給取、退屈問答 諸家（14名） 142

今年のお仕事に対する御感想 140

日ソ国交調整を続ける―ソ連の歴國會 角谷健次/北崎吉/富士原馬/布施勝吉 九山政男

銃眼 日本人の対米感情 福永恭助 151

阿部内閣政策の動揺 浅沼稲次郎 153

大征服者タメルラン 植村清二 151

従軍画 破屋のルイン 恩地孝四郎 167

支那革命行 太田宇之助 166

一九四〇年注文帳（*漫画） 岸丈夫/加藤悦郎 176

光緒皇帝と西太后 久保田金徳 182

従軍画 孫逸仙の思ひ出 関本整一 194

想ひ出の戦線 駐屯陣中記（*小説） 奥野信太郎 209

愛読者カードに就いて 燕京行楽記 江越信一郎 218

前線の手記 殘敵掃蕩の仕事（*小説） 荒川治郎/橋本三郎画 227

南昌戦へ（*小説） 南昌戦へ（*小説） 荒川治郎/橋本三郎画 227

回顧・昭和十四年 編輯後記 鶴田吾郎 3

「文藝春秋」時局増刊 二九 一九四〇年二月一日発行

原紙 須磨弥吉郎 4

浅間丸事件と日米無條約時代 外務省情報部長 中谷武世 15

浅間丸事件と我が対英外交の性格 伊東深水 14

浅間丸事件所感 松波仁一郎 17

復讐せよ! 榎久 18

浅間丸事件の国際法観 法學博士 松波仁一郎 17

鮑まで法的に 代議士 田村幸策 18

浅間丸臨検事件の感想 文藝評論家 田村幸策 17

断乎たる決意 東京朝日新聞社 浅野晃 18

英艦臨検事件 平凡社長 中谷武世 18

臨検拉致権拡大論（海軍帝国は―を要す） 同野通信理事 町田梓楼 18

水掛論か? 伊藤正徳 19

従軍画 迷彩 三輪晃男 20

大陸へ進出するものへ 同野通信理事 伊藤正徳 20

「青島会談と新中央政権」座談会（宮房密郎/太田宇之助/佐藤安之助/高木陸郎/藤田栄介/藤田中/松井七夫/太田宇之助） 経済学博士 杉村広蔵 24

銃眼 桐原葆児 39

新しい労働者層 39

近頃の外交 感想一束 聖戦 反発せよ ピーター大帝とスターリン ソ連外交の大転機	赤松祐之 高垣松雄 河村太一郎 北村小松 西下誠一 山下誠一	51	47	43	41						
日本飛行機工業発展の根本策 国民各層の声に聴く 学生インテリ座談 従軍画 山西省忻縣城内 統一白兵戦の実相 国民各層の声に聴く 婦孺兵・街を歩く 銀座街頭に佇みて 母子寮と失明軍人寮 母かたる大学街 従軍画 鎮江 国民各層の声に聴く 農民座談 遺族のことなど 従軍画 鉄道警備 アジア英雄譚 アクバル大帝 戦車縦横談 歐洲知識人の対大戦観 ドイツ知識階級と英国 民主主義と戦争 J・M・マリー 従軍画 山西省忻口鎮 戦死したインテリ兵士の手帖から 浦塩艦隊撃滅—上村提督の苦心 従軍画 楊柳の並木 花咲く戦野—分隊長の日記 シユベイ号自爆—批判 従軍画 昆明湖の石舫 英仏と独逸の作戦—戦争月評 編輯後記	高見澤由良 倉島竹三郎 鷺尾洋二 伊東深水 今村信吉 日比野士朗 三輪晃勢 植村清二 石川信雄 藤田実彦 大賀小四郎 織田正信 小島一谿 平田耕一 板野厚平 木村毅 松野一夫 高岡徳太郎 瀨木整 橋本三郎 池崎忠孝 高岡徳太郎 大場弥平	100	90	89	76	68	56	51	47	43	41
『文藝春秋』時局増刊 三〇 表紙(熱河承徳の少年喇嘛僧) 日次写真 東日記録映画「揚子江より」 総力戦下の揚子江 新政府の性格と和平方針 従軍画 兗州の田舎 議会に於ける大陸通貨問題 現地報告 危機に瀕する国共合作 東北経済漫筆 遺族の心境を聴く座談会	吉田潤撮影 宮田重雄画 杉村広蔵 太田宇之助 吉田博 石矢知行 エドガー・スノウ 島田晋作 倉本重千代/辰野野 中村鑑男/山本信次郎/菊池寛	1940年3月10日発行	38	32	28	26	18	17	10	4	3

銃眼 生産力拡充の是非 民心培ふべし 興亜奉公日 東亞標準語 婦孺兵士について 従軍画 青島 夢に梯子を掛ける—滿洲国の博物館運動 財界人の独語 滿洲—現地報告 滿洲には國語が二つある 戰時日本へ 若き戦士と心きそふ 民族の誇り 大陸言語の旅から 北京今昔物語 新中国の女性を語る座談会 遊支雜記帳 常磐炭田地帯を往く 相公き、がき 華僑社会学 滿洲—現地報告 北滿開拓地見聞記 現地の胎動—現地思想 海軍砲艦隊と共に—太田備後從記 緑の城—小説 従軍画 兗州の門 従軍画 居庸関長城記 台児莊戦話集—小説 編輯後記	本位田祥男 瀧澤秀雄 清水淺太郎 今日出海 井上兵吉 日比野士朗 能勢亀太郎 藤山一雄 森広蔵 官井一郎 青木実 茅野蕭々 五十嵐力 魚返善雄 石橋丑雄 小泉丹 田中裕一 瀧川政次郎 司松太郎 小田桐孫一 城所英一 朱美保 上田広 無縁寺心澄画 吉田博 棟田博 吉田貫三郎画 白石潔 鈴木朱雀画 能勢亀太郎 大場弥平 成吉野厚平 成吉野厚平 成瀬関次 故板野厚平 伍長画	81	76	70	66	65	56	53	47	45	43	41
『文藝春秋』時局増刊 三一 扉絵 還都政權 大陸画文集 龍華寺 新中央政府に要望す 新政権への要望 思想的布陣を堅確にせよ 眞の近代国家たれ 心からの経済提携へ	柏原覚太郎 杉村広蔵 池田達郎 津久井龍雄 加田哲二 北崎吉 園田三朗	1940年4月10日発行	21	18	14	10	9	4	3	8	3	

彌栄村病院長の言伝て 大陸画文集 管渡口 明日の支那と共產党 歐洲大戦の軍事的判断—大歐洲大戦より観たる今迄の支那 藤原物価政策を衝く 大陸画文集 北京の公園 近東に於ける宿敵—ソ連と英国 ソ芬和平とソ連の動向 現地と内地 対支文化工作を強力に展開せよ！ 銃眼 物価政策の改善断然必要 時と根 戦時体制の強化 停の入宮 科学者の予言 敵情資料 南支雜記 大陸画文集 軍艦の眼 現地報告 新東亜の日本語—井上兵吉の「東亜標準語」をよんで 村の婦孺兵 何希甫を偲ぶ 凍土紀行—滿洲の寒に於て、住民の在り方 東西漫画シソーラ—漫画 支那の国旗を語る 大陸画文集 釣 我が民間航空の大陸進出座談会 大陸画文集 雨花台 笑ふ兵隊—陳述曹長の畫に 大陸画文集 包頭郊外の丘 北支の瓦裝飾 陸相ホア・ペリシヤの立場 殷賑産業地帯—遼東兵上場地帯を歩く 大陸画文集 陸戦隊の口 冬期攻勢撃砕記—小説 大陸画文集 北京北海 鉄木真立ち上がる—成吉思汗伝—その二 編輯後記	長与善郎 深澤紅子 中保与作 河野恒吉 丸川賢太郎 足立源一郎 アルバート・バイトン 丸山政男 平田小六 林藤 石山賢吉 町田梓樓 宮本武之輔 小野賢一郎 本多顕彰 嘉治隆一 長沼弘毅 小林茂 泉興長 結城草果 倉島竹二郎 小田桐孫一 山縣初男 鳥崎鶏二 池田遙邨 三木辰夫 火野葦平 深澤紅子 足立源一郎 原春一郎 里村欣三 小林茂 生澤朗画 島崎鶏二 大場弥平 鈴木朱雀画	90	85	76	70	64	63	56	38	32	31	24		
『文藝春秋』時局増刊 三二 扉絵 還都政權 大陸画文集 龍華寺 新中央政府に要望す 新政権への要望 思想的布陣を堅確にせよ 眞の近代国家たれ 心からの経済提携へ	大場弥平 鈴木朱雀画	256	240	239	212	209	200	194	193	192	184	180	179	178

戦時期メディアの編成と展開

Organization and Progressing of Media During Wartime in Japan
Total Contents of “GENTI HOKOKU” Published by BUNGEISHUNJYUSHA (1)

KAKENO, Takeshi